
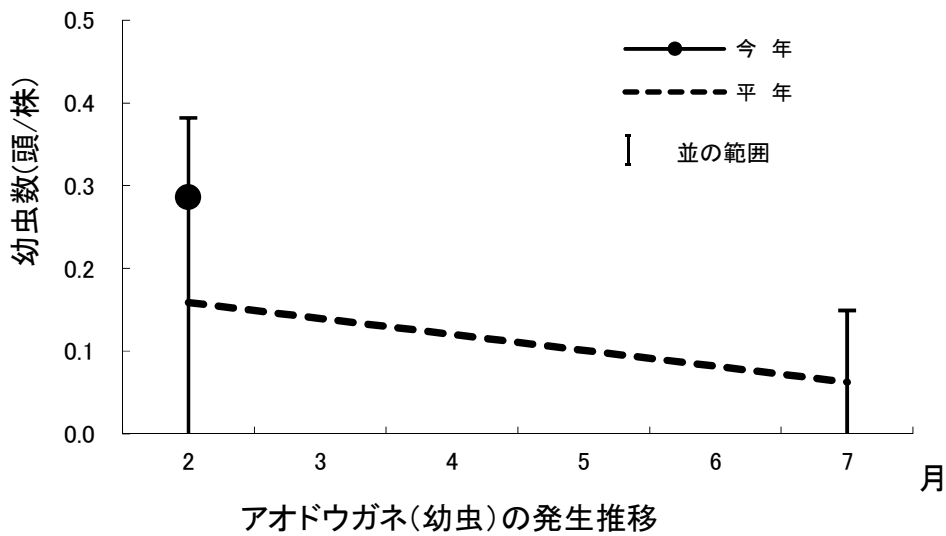


作物	さとうきび	地域	沖縄群島
病害虫名	① アオドウガネ		
2月の発生量(現況)	並		
3月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	幼虫数の今年の発生推移から、2月と同程度の発生量と考えられる。		


発生量の根拠(調査結果)

- ・ 2月上旬の調査の結果、株当たり幼虫数は0.3頭(前年0.3頭、平年0.2頭)と平年並であった。



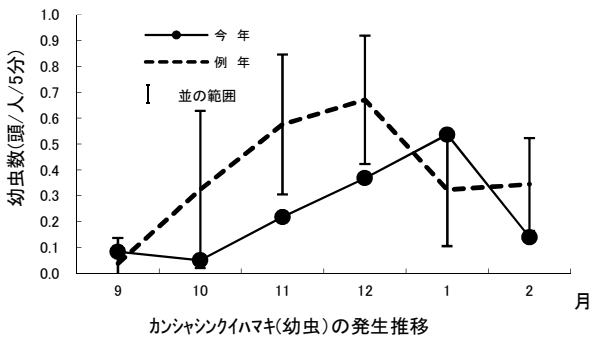
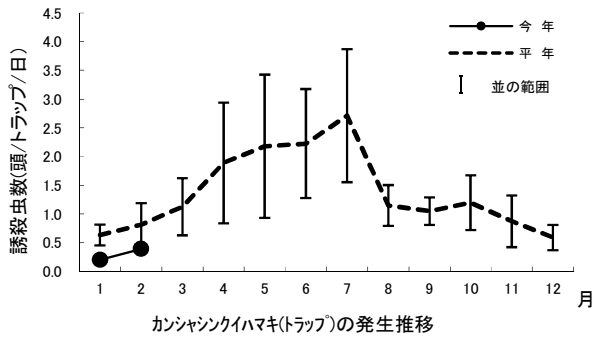
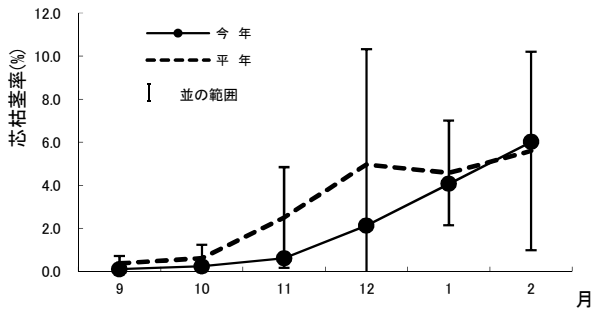
防除のポイント

収穫後直ちに碎土を行い、老熟幼虫を物理的に防除する。

作物	さとうきび	地域	沖縄群島
病害虫名	② メイチュウ類 (カンシャシクイハマキ)		
2月の発生量 (現況)	並		
3月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	誘殺虫数の平年の発生推移から、2月より発生量は増加すると考えられる。		

発生量の根拠 (調査結果)


- ・ 2月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯莖率は6.0% (前年1.3%、平年5.6%) と平年並であった。また、芯枯莖切開調査の結果、確認された幼虫のうち13%が本種であり、人当たり5分当たり幼虫数は0.1頭 (前年0.5頭、例年0.3頭) と例年よりやや少なかった。
- ・ 2月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.4頭 (前年0.9頭、平年0.8頭) と例年並であった。



防除のポイント

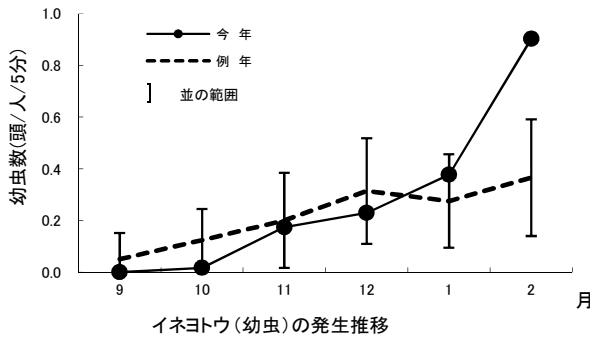
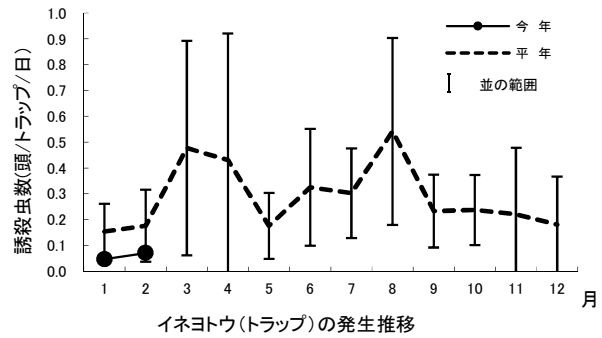
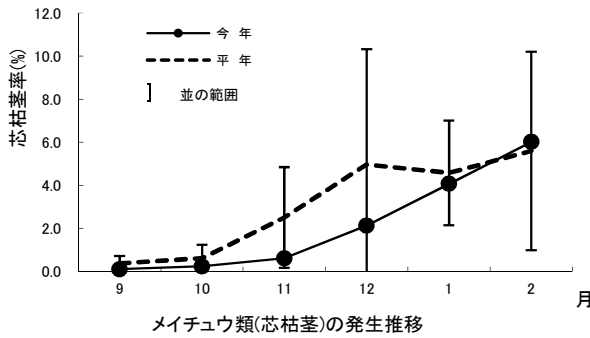
- ・ ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ莖を枯死させる。
- ・ 加害による芯枯れを防止し有効莖を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・ 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、莖と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・ 植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。

・ 平成29年度病害虫発生予察注意報第5号参照。

作物	さとうきび	地域	沖縄群島
病害虫名	③ メイチュウ類 (イネヨトウ)		
2月の発生量(現況)	やや多		
3月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	誘殺虫数の平年の発生推移から、2月より発生量は増加すると考えられる。		

発生量の根拠 (調査結果)

- ・ 2月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯莖率は6.0% (前年1.3%、平年5.6%) と平年並であった。また、芯枯莖切開調査の結果、確認された幼虫のうち87%が本種であり、人当たり5分当たり幼虫数は0.9頭 (前年0.4頭、例年0.4頭) と例年よりやや多かった。
- ・ 2月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.1頭 (前年0.1頭未満、平年0.2頭) と例年並であった。



防除のポイント

- ・ 卵は塊で産み付けられ、ふ化した幼虫は葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ莖を枯死させる。
  - ・ 加害による芯枯れを防止し有効莖を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
  - ・ ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
  - ・ 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、莖と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
  - ・ 植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- ・ 平成29年度病害虫発生予察注意報第5号参照。